

うめく「生」

アフリカ・赤道直下から

—7

その部屋の壁に、張り紙があった。

「みんな死ぬ。すべては水のように。流れ流れていく。みんな死ぬ」

黒いサインペンで書かれた豆粒大の文字。ぞっとするような文面だ。書いたのは、エルネスト・エルナツト君。内戦が、14歳の少年をここまで追い込んだ。



肉親現れず 壁見つめる日々

ルワンダ南部・ツタレの孤児受け入れ施設。エルナツト君はここへ来て、もう、半年になる。

みんな死ぬ 14歳の叫び

部屋から壁をながめる日に、孤独の影が深まっている。

1994年4月に始まったルワンダの内戦。フツ族が100万人とも言われるツツ族を虐殺。ツツ族にみる仕返し各地で、情報は少なくなる。

しかし、エルナツト君には朝報は届かない。湖在が長期になればなるほど、情報は少なくなる。

ほしい。「頑張れよ」。所を掛けると、エルナツト君はじっとただけほほ笑んだ。

「頑張れよ」。所を掛けると、エルナツト君はじっとただけほほ笑んだ。

内戦が激しかった3年前の4月の朝。首都キガリ。「パン」。小さな銃声だった。エルナツト君が外へ出ると、かまじの横で母が血まみれになって倒れていた。朝食の準備をしていた父は

キャンピング車に向かう途中、兄弟ともはぐれた。

が腕力して、子どもたちが肉親探しを続けている。

「頑張れよ」。所を掛けると、エルナツト君はじっとただけほほ笑んだ。

「頑張れよ」。所を掛けると、エルナツト君はじっとただけほほ笑んだ。

の孤児受け入れ施設。エルナツト君はここへ来て、もう、半年になる。

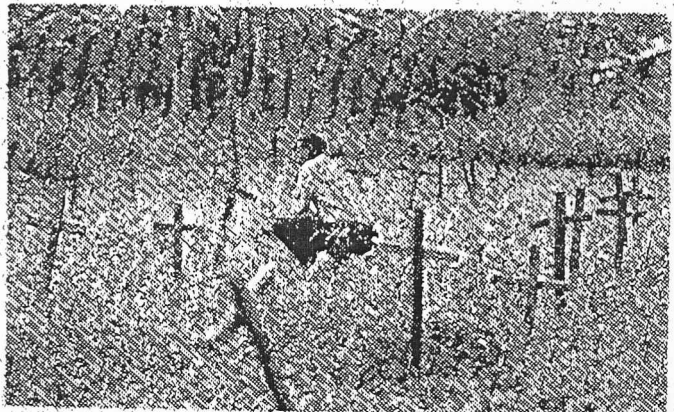
その前日、偵察のため村の男たちと出掛けるとき、行方は知れない。

その手で「死」ではな

の。走ると、母は「逃げなさい」としかりつけるように言った。エルナツト君は兄(18)と、生ま

知らぬ間に家族が住んでい

壁の張り紙は、ベッドのまくら元のすぐ上にある。横になると、いつでも読める。エルナツト君は毎晩、これをながめて



多くの人が殺された教会にある墓地。内戦ではたくさんの子供が孤児になった＝ルワンダ・キブンゴで

文 小倉 孝保
写真 玉置 勝巳

〒530-051 大阪市北区梅田3-4-5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救済金」係(郵便振替・009770099)

100001